

ビジネスを“止めない・失わない”を実装する

Unbreakable を体現する 日立ヴァンタラの品質 DNA

AIの急速な普及やDXの進展により、企業におけるデータの価値はこれまでになく高まっています。データ活用が企業の競争力を高める一方、データインフラが停止した際のリスクは計り知れません。日立ヴァンタラは、さまざまな業種のミッションクリティカルシステムを支えるデータインフラを提供しています。日立ヴァンタラのストレージ製品は、国内外で「Unbreakable = 壊れない」と称されており、Fortune Global 100企業の86%に採用されるなど、グローバルで高い評価を得ています。ミッションクリティカルな現場から求められる高い品質は、設計・製造から保守・サポートに至るまで、全社に根付く統合的な品質マネジメントによって実現しています。本記事では、日立ヴァンタラの品質保証部門のキーパーソンへのインタビューを通じて、品質を競争優位として磨き上げてきた背景と、決して妥協を許さないその実装のメカニズムを紐解きます。



もしもデータインフラが 停止してしまったら

「システムが停止した際、社会にどのような影響が及ぶのか。私たちは常にその重大な責任を意識しながら製品づくりに向き合っています」——日立ヴァンタラ 最高品質責任者 (CQO) 岡木 拓也は語り始めます。

現代社会において、ITは社会インフラそのものと言えるほどの存在になりました。たとえば、病院の電子カルテシステム。万一停止すれば、患者の過去の病歴やアレルギー情報が確認できず、適切な処置や手術が行えなくなるリスクが高まります。交通機関のシステムが停止すれば、切符の発券や運行管理が麻痺し、何十万人もの足に影響が出るでしょう。銀行のATMや決済システムがダウンすれば、経済活動そのものがストップします。システムの停止は、企業のビジネス機会の損失にとどまらず、人々の生活や命にかかわり、サービス提供者の社会的信用を根底から揺るがす事態に直結するのです。

これらのシステムを根底で支え、不可欠な「情報」を担っているのが、ストレージを中心とするデータインフラと呼ばれているソリューション領域です。

岡木は、「私たちが提供するものは、単なるデータの容れもの

ではありません。お客さまのビジネスの継続性そのものなのです。システムが停止することも大きな問題ですが、数あるリスクの中でも、特に回避すべき重大な事態がデータ損失 (Data Loss) です」と話します。

近年、ビジネスで扱われるデータ量は急増しており、ペタバイトクラスのデータを扱う企業も珍しくありません。万一ストレージが破損し、データが損失した場合、バックアップからシステムを復旧 (リストア) させるだけでも、途方もない時間がかかることが見込まれます。

「装置の電源スイッチを再び押せば直る、という次元の話ではありません。膨大なデータを戻す作業には相応の時間が必要で、その間、お客さまの業務は完全に止まってしまいます。だからこそ、ストレージの品質と信頼性は、企業の命運を左右する最重要課題なのです」(岡木)

日立ヴァンタラの価値は、 「Unbreakable」であること

日立ヴァンタラは、日立製作所から分社化・独立した企業であり、日立グループが長年培ってきたモノづくりのDNAを色濃く受け継いでいます。世界中で社会インフラを支えている日

日立ヴァンタラが、ストレージ製品における根幹の設計思想として掲げているのは、次の2つの約束です。

「データは確実に守り抜く」、「お客さまのビジネスを止めない」。

ストレージは、精密な電子部品の集合体であり、それらを制御するソフトウェアによって稼働します。物理的なものと論理的なものが統合された存在としてソリューションが成り立つのですが、物理的な部品で永遠に壊れないものは存在しません。

「部品がいつか壊れるのは、避けられない事実です。その上で、私たちは“部品が壊れてもデータを確実に守り抜き、システムとしての稼働は止めない”ことを設計思想の大前提に置いています。そのために、品質保証部門が中心となって、製品企画から開発、製造、そしてお客さま先での運用に至るまで、全社的な品質意識の啓蒙と仕組みづくりを徹底して推進しています」(岡木)

徹底した品質を貫く プロフェッショナルの判断軸

日立ヴァンタラのストレージが「Unbreakable = 壊れない」と評価される理由は、高度な技術力や堅牢なシステム構成だけにあるわけではありません。その根底を支えているのは、社員一人ひとりに浸透している「品質マインド」です。

岡木は、「日立グループには、品質第一 (Quality First) という精神が根付いています。しかし、いくら立派なプロセスやチェックリストを作っても、その実行にかかわるすべての人間の意思が伴わなければ意味がありません。現在の高品質を支えているのは、私たちの品質に対する“執念”とも言える品質マインドです。これがベースにあるからこそ、すべてのプロセスが確かな効果を伴って機能するのです」と話します。

この品質マインドは、日々の業務における社員の思考や判断の基準となっています。たとえば、顧客先での問題発生時や、テスト中に想定外のエラーが起きた場合を考えてみましょう。何度やっても再現しない事象に直面すると、「とりあえず現象は収まったように見える」、「回避策によってお客さまにご納得いただいた」といった理由から、ここで対応をクローズしようと判断されるケースも、現実には少なくありません。

「しかし、私たちは、そこで終わらせません。再現性がなくても、論理的に何が起きているのかを推定し、顧客対応がクロー

ズした後であっても原因究明を継続し、本質的な対策につなげます。発生する問題の原因は、必ずどこかにあります。開発や製造工程だけでなく、営業のヒアリング段階や、部品の調達工程などに隠れているかもしれません。二度と同じ問題を起こさないために執念を燃やす。この妥協なき行動を支えているのが品質マインドです。日立ヴァンタラの精神的な支柱であり、私たちが世界に誇る品質の源泉です」(岡木)

最終的な品質を担保するのは人間の責任感と徹底力。岡木は、「私たちはこれからも、この品質マインドをさらに研ぎ澄ませ、お客さまの重要な業務やサービスの継続を守り抜きます。そして、トラブルによる見えない対応コストを防ぐことで、お客さまのトータルコストの削減とビジネスの成長に貢献していきたいのです」と話しています。

上流工程からプロセスそのものに 品質を実装する

岡木の語る強烈な使命と品質マインドは、実際の製品開発においてどのように具現化されているのでしょうか。品質保証本部 開発品質保証部 部長 森永 広介は、その設計思想の根幹を次のように解説します。

「私たちは、データの喪失やデータ不正のトリガーを徹底的に排除することに強くコミットした設計思想を持っています。ストレージシステムを構成するハードウェアは、コントローラーから電源、ファンに至るまで徹底した多重化・冗長化を図っています。ただ、単に部品を二重化して並べるだけでは不十分。万一の故障時にも、システムを止めずに動き続けられるようにするためには、ハードウェアとそれを補完するソフトウェアがう



最高品質責任者 (Chief Quality Officer)

岡木 拓也

お客さまの声

“ 品質へのこだわりや価値観が互いに一致していることもあり、日立ヴァンタラを選ぶことは自然な選択でした。 ”

化粧品販売会社

出典：hitachivantara.com/ja-jp/company/customer-stories/cosmetic-retailer-case-study

まく連携して動作する設計が欠かせません」

一部の部品が壊れかけたり、システムが想定外の状態に陥ったりした際に、ハードウェア単体では防ぎきれない事態が発生するかもしれません。そこをカバーするのが、ソフトウェアによる「ガード救済」の仕組みです。プログラムが異常を自律的に検知し、故障箇所を瞬時に切り離すことで、システム全体への波及を防ぎ、稼働を継続させます。ハードウェアとソフトウェアが両輪となって極限の可用性を担保する設計こそ、“Unbreakable”を実現する最大のカギなのです。

優れた設計思想は、正しく実装されることで初めて価値を生みます。日立ヴァンタラの品質保証部門は、出来上がった製品を最後に「検査でチェック」をするのではなく、開発の最上流から入り込み、プロセスそのものの中に品質を「実装する」ことに重きを置いています。

「作る前、作る途中、作った後。これらの各段階で品質保証部門による厳格なレビューが組み込まれています。たとえば、FTA (Fault Tree Analysis：故障の木解析) やFMEA (Failure Mode and Effects Analysis：故障モード影響解析) といった手法を用い、考え得るあらゆる故障パターンとその影響を事前に分析します。さらに、長年蓄積してきたデータ保護設計指針など、日立ならではのノウハウを掛け合わせて検証を行います」(森永)

世の中には数多くの品質管理の手法が存在します。FTAや

FMEAも、一般的な手法であり、特殊なやり方ではありません。それでも森永は「当たり前のことを愚直に、きちんと、徹底してやり続けることが最も重要なのです。さまざまな現場を見る機会があるのですが、一見するとできていないように見えるのですが、実はきちんとできていないという現場は意外と多いものです」と指摘します。日立ヴァンタラには、長年の実践知を体系化し、継続的に進化させてきた独自の品質マネジメントがあります。テクノロジーも取り入れながら進化を続け、業務プロセスの中で一貫して実行される仕組みとして機能しています。

巨大化するソフトウェア品質の管理にAI活用も

ハードウェアの進化に伴い、ストレージを制御するソフトウェアも高度化・複雑化の一途を辿っています。日立ヴァンタラの全機種に搭載されているストレージOSである「SVOS (Storage Virtualization Operating System)」は、いまや汎用OSの中でも、OSの動作を支える基盤部分に匹敵するソースコード規模です。

森永は、「これだけ巨大なプログラムになると、機能追加や修正にあたって一部のコードを修正すると、開発者が想定していない思わぬ箇所に影響を及ぼすリスクが出てきます。想定外の挙動を起こさせないための仕組みづくりが、現在の品質保証において極めて重要になっています」と話します。

その対策として、開発情報はGit(分散型バージョン管理システム)で一元管理。エンジニアのコーディング活動や修正履歴、さらにはセキュリティアップデートの適用状況などの重要な情報を、開発部門と品質保証部門が常に共有・可視化できる状態を維持し、透明性の高い品質管理を実現しています。

さらに、この複雑なソフトウェア品質を支えるために、AIの活用も推進。ソースコードという企業の最重要機密を扱うために



品質保証本部 開発品質保証部
部長 森永 広介

セキュリティを最優先し、社内の閉じた環境で運用する「Local LLM(大規模言語モデル)」を独自に稼働させています。

「社内に蓄積されている過去の膨大な修正履歴を含めたデータをこのAIに学習させています。現在実験中の段階ですが、エンジニアがプログラムを修正する際に、AIがモジュール同士の複雑な関連性を解析し、“このコードを触ると、この部分に影響が出る可能性がある”と教えてくれたり、意図しないエラーが出た際に“原因はここではないか”と提案してくれたり。これらをAIが示唆してくれることで、開発者に気づきが生まれますから、開発効率は高まるはずですよ」(森永)

AIが影響範囲の特定や原因究明をサポートすることで、人間が見落としがちなリスクを網羅的に洗い出すことができます。その一方、森永は「AIに完全に依存することはなさそうです」とも話します。「最終的な確認と判断は必ず人間が行う必要があります。AIは優秀ですが、現状ではあくまで高度な支援ツールというレベル。優れた開発者とAIが協調することで、バグの混入をゼロに近づけていきたいと考えています」(森永)

カタログに頼らず、 過酷な条件で“実力”を見極める部品選定

設計段階でどれほど完璧な「Unbreakable=壊れない仕様」を充たしても、製品を構成する膨大な部品群の一部にでも欠陥があれば、システム全体の信頼性は守れません。日立ヴァンタラにおけるハードウェア製造の最前線とサプライチェーンの品質管理を担う品質保証本部 開発品質保証部 担当部長 梅澤 唯史は、部品選定における絶対的なルールを次のように表現します。

「私たちは、カタログスペックだけを鵜呑みにしないという姿勢を貫いています」

汎用的な電子部品であっても、部品メーカーが提示する保証値や寿命を額面どおり受け取ることはありません。なぜなら、ストレージは常にデータの書き込み／読み出しが実行される過酷な稼働環境下に置かれており、想定外の負荷がかかるケースがあるためです。

「現実には起こりうる厳しい使用環境より過酷な状況を想定し、部品の定格に対する“ディレーティング(余裕を持たせたマージン)”を独自に厳格に設定しています。ギリギリの限界値における実力を自らの手で再評価し、マージンを確保できた部

品だけを採用しているのです」(梅澤)

さらに、製造工程の最終関門としてスクリーニングを徹底します。工業製品の故障率の推移を示す「バスタブ曲線(故障率曲線)」によれば、新製品の市場投入直後に発生する「初期不良」は存在します。日立ヴァンタラでは、この不良を納品後のユーザー環境ではなく、出荷前の工場内で出し切るために過酷な稼働実験を実施します。

梅澤は、「装置を高温／低温環境などの厳しい条件下で連続稼働させ、潜在的に弱い個体をあぶり出します。ただ不良品を排除するだけでなく、なぜ弱い個体が発生したのかという原因を究明し、サプライヤーとも協力して根本的な製造プロセスの改善に繋がっています」と話します。

AIとARの融合による、 人為的ミスの極小化

物理的な部品の品質を極限まで高めると同時に、製造工程における「人為的ミス(ヒューマンエラー)」を防止するための最先端のアプローチも始まりました。

ミッションクリティカル用途で使用されるストレージ製品は、搭載するドライブの種類や構成がユーザーごとに異なるなど、完全に同一仕様の完成品を大量に生産し、納品するケースはまれです。日立ヴァンタラでは、生産ラインにおいて正しい構成部品が組み込まれていることを自動で照合・判断するための取り組みをスタートさせました。その一環として、AR(拡張現実／複合現実)とAIを組み合わせた構成支援システムを米国の工場において試験導入しています。

「人間は、どれだけ気をつけていてもミスをする生き物です。そ



品質保証本部 開発品質保証部
担当部長 梅澤 唯史

ここで、作業者が実際の機器を組み立てる際に、スマートグラスを使ってARでガイドを重ねて表示し、手順をナビゲートします。もし誤った部品を組み込もうとしたり、構成を間違えたりした場合には、AIがその場で瞬時に検知し、ARの視界上に警報や注意喚起を表示して作業を止めます」(梅澤)

この取り組みでは、ネジの締め付けやケーブルの挿し込みなど、担当者によってバラつきが出やすい作業においても、AIが常にモニターし、誰が担当しても同じ品質を実現できる仕組みを目指しています。これにより、複雑な構成における作業ミスを大幅に削減し、教育効率と作業品質の向上につなげたい考えです。

現場に入り、 サプライヤーと共に品質を高める

日立ヴァンタラの品質管理対象は、自社工場の中だけにとどまりません。部品を調達するサプライヤーや、そのサプライヤーに部品を納品するTier2、Tier3のサプライヤー、さらには素材メーカーとやり取りするケースも出てきます。各社とは、日ごろから製品不良の解析と改善において密接に連携。品質ミーティングを定例化することで、歩留まり改善策や製造プロセスの変更点といった情報を双方向で共有する体制を整えています。実際に、そうした取引先の工場へ品質保証部門のエンジニアが直接足を運ぶことも珍しくありません。

さらに、新規部品の採用段階では共同評価を行うなど、設計段階から品質を作り込むアプローチも徹底しています。これらの取り組みにより、単に部品を調達する側／供給する側という関係を超え、ミッションクリティカルな製品品質を共に支えるパートナーシップの基盤を築いています。

梅澤は、「私たちは現場・現物主義を貫いています。実際に、書面のチェックリストで、基準を充たしている、と報告されても、現場の空気や作業者の動きを見ないとわからないリスクや“勘

所”があるのです。そして、不備を見つけたら一方的に改善を要求する下請け管理ではなく、私たちのエンジニアが現場に入り込んで技術支援を行い、一緒に品質を育てるパートナーとしての関係を築いています」と話します。

ただ、それは日立ヴァンタラが培ったものづくりのノウハウを惜しみなく提供することにもつながります。梅澤は、「結果的に他社向けに出している部品の品質も上がってしまうかもしれませんが、業界全体が良くなるのは良いことなのです」と笑顔を見せます。「相手は直接の取引先ではありませんし、正直なところ、最初は煙たがられることもあります。それでも、最後になると品質が上がって感謝していただけます。非常にやりがいのある仕事です」。

私たちがサプライヤーに求める要件は高度で専門性が高く、それに応えられる企業は決して多くありません。だからこそ、パートナー企業とともに品質を高めあい、お互いに成長していく「品質のエコシステム」を構築する必要があります。

品質向上には当然コストと手間がどちらもかかりますが、梅澤は「迷ったら品質を取る」と断言します。「品質にかかるコストは、出荷後に万一のことが起きて発生する莫大な対応コストや、何よりお客さまからの信用失墜という取り返しのつかない損失を防ぐための投資です」。

現場を視察する際に注目するのは、“作業者がやりづらさを感じているところ”です。不良の多くは、現場のやりづらさや無理な作業に起因しているケースが多い傾向にあるといい、そのあたりを見極めるスキルもまた、日立ヴァンタラの社内に根付いています。

データを守り抜くための 究極のテスト

サプライヤーの現場、設計・開発、生産現場というすべての場面で品質を確保し、最後に行われるのは、極限状態を想定

サプライヤー企業の声

“ 私たちキオクシアは、日立ヴァンタラのデータインフラに不可欠な SSD を提供し続けています。停止や誤動作、データロスが許されないことから SSD に対する品質要求水準も極めて高く、日立ヴァンタラの品質問題の芽を早期に摘み、後工程に不良を逃さないという強い姿勢は感服するものがあります。日立ヴァンタラの経験と実績に裏打ちされた深い洞察や探求心は目を見張るものがあり、私たちにとって今もなお多くの学びの場を提供してくれます。品質第一主義と真面目なものづくりへの取り組みは同じ日本企業として共通する価値観であり、今後とも日立ヴァンタラと共に社会基盤を支えていけることを誇りに思っております。

キオクシア株式会社 SSD事業部 SSD信頼性技術・品質保証部長 松尾 裕一郎氏 ”

製造パートナーの声

“ 日立ヴァンタラ製品が高く信頼されている理由は、製造に携わるようになってわかりました。試験の数が圧倒的に多いのです。

UMC・H エレクトロニクス株式会社 代表取締役社長 水越 浩幸氏 ”

した検証プロセスです。

日立ヴァンタラが最も重視しているのは、平時の安定稼働はもちろんのこと、非常時に非常装置が確実に働くかどうか。そのために、稼働中の装置のケーブルやモジュールを順番に引き抜いていき、システムが止まらずに動作を継続することを確認するホットスワップ(活線挿抜)の試験を容赦なく行います。さらに過激なのが、稼働中のコンセントをいきなり引き抜くという「抜栓試験(電源断テスト)」です。

落雷やビル全体の計画停電など、予期せぬ電源喪失が起きた際、ストレージ内のキャッシュメモリにあるデータは通常であれば消えてしまいます。しかし日立ヴァンタラの製品はすべて、電源が落ちたことを検知した瞬間に内蔵バッテリーが立ち上がり、キャッシュ内のデータを安全な不揮発性メモリへと退避させる仕様です。この非常用機能が確実に作動するかどうかを、実際に電源を引き抜いてテストするのです。

品質保証本部 開発品質保証部 担当部長 梅澤 唯史は、「お客さまには絶対にやってほしくないことを工場で行っていることになりましたね」と話す。「もちろん、このテストによって部品が劣化するようなことはありません。一方で自動車のエアバッグのテストと同様に、「いざという時」に確実にデータを守り抜けることを事前に証明するという点に注力しています。その確認ができて初めて、お客さまの元へ出荷できるのです。

企業文化を含めた 「日本の品質」を世界へ

日立ヴァンタラの品質へのコミットメントは、製品がお客さまのデータセンターに納品された後も決して途切れることはありません。世界中で稼働するシステムを監視し、万一のトラブル発生時にも、最前線でお客さまのビジネス継続を支えます。品質保証本部 本部長 中森学は、「品質は、システムやツ

ルではなく、結局のところ人が支えているのです」と話します。

日立ヴァンタラでは全社員のうち10%以上が品質保証本部に在籍しています。これは一般的なメーカーと比べて、際立って厚みがあります。

「これだけの人数が品質部門に居るからこそ、製品の企画・開発段階から、製造、そして出荷後のサポートに至るまで、製品ライフサイクルのすべてにおいて一貫して品質に責任を持つ体制が可能になるのです」(中森)

技術的エビデンスで お客さまに直接向き合う品質対応

システムインフラの世界において、日立ヴァンタラの品質保証部門が持つ最大の特長があります。それは、「困難な問題に対処する際には、品質保証部門の担当者が自ら直接お客さまをサポートする」という姿勢です。

一般に、トラブルが発生した際の窓口は営業担当者や専任のサポート部門が担います。品質を司る部門や開発部門の担当者はあくまで裏方で、お客さまと話をする機会はほとんどありません。しかし、日立ヴァンタラは違います。万一、お客さま



品質保証本部 本部長
中森 学

の環境で重大な障害が発生した際には、品質保証部門の責任者や技術者が自ら現場へと足を運びます。営業やサポートに任せきりにするのではなく、製品の品質に最終責任を持つ者として、直接ご説明にあがるのです。

システムトラブルに直面した際、お客さまの情報システム部門が最も不安と不信感を抱くのは、「なぜ問題が起きたのかわからないまま、とりあえず復旧した」というブラックボックス化された対応です。日立ヴァンタラでは、高度な検証技術を用いて精緻な根本原因分析(RCA)を実施し、「なぜ起きたのか」、「どうすれば再発しないのか」という技術的なエビデンスとともに、お客さまに直接説明します。

「自分たちの手で生み出した製品には、最後まで責任を持つ。その覚悟があるからこそ、逃げずにお客さまの前に立ちます。この姿勢と透明性の高い説明が、結果的にお客さまへの真の安心感と深い信頼に繋がると確信しています」(中森)

24時間×365日 世界規模の稼働監視と予防保守

もちろん、トラブルを起こさないためのプロセスも整備しています。そのために日立ヴァンタラが注力しているのが、「止めない運用」を実現するための高度な稼働監視体制です。現在、世界中のお客さまの環境で稼働している数万台規模のストレージと、それらに搭載された数百万台規模のドライブの稼働状況を、ネットワークを通じて24時間365日モニタリングしています。

「私たちが監視しているのはハードウェアやソフトウェアが正常に動いているかどうかの稼働データ=テレメトリです。お客さまが保存しているデータの中身は見られません。セキュリティとプライバシーを完全に担保した上で、部品単位での詳細な状態を常に把握しています」(中森)

この常時モニタリングにより、特定の部品のエラーレートが規定のしきい値を超えた場合など、障害の予兆をいち早く検知することができます。そして、システムが実際に停止してしまう前に、計画的に保守作業を行い、部品を予防交換するプロアクティブな保守を世界規模で実行できるようになります。

最高の品質を グローバルに展開

日立ヴァンタラは、グローバルにビジネスを展開しています。日本国内で培ってきた高い品質基準や過酷なテストの仕組み

は、米国の工場にも横展開され、世界のどこでも同等の品質で製品を提供できる仕組みを整えています。

さらに、サポート体制においても日米欧の主要3拠点が連携し、地球の自転に合わせてサポート業務を引き継ぐ「Follow the Sun (太陽を追いかける)」体制で、24時間×365日、途切れない体制で全世界のお客さまをサポートし続けることができます。

海外のお客さまに対しては、現地のサポートチームがフロントに立つことがほとんどです。しかし、日本の品質保証部門と設計・開発部門は常に彼らを背後で支え、密に連携したサポートを提供できるようにしています。

「海外で起きた難解なトラブルであっても、現地のチームに任せきりにはしません。日本の品質保証部門と設計部門がログを解析し、原因究明と対策をリアルタイムに現地へフィードバックしています。そのため、海外のサポートチームと原因究明のミーティングを行う機会も多いです。ただ、日本側が相手に合わせた時間にするため、夜中や早朝の会議になることもあります。迅速な支援のために柔軟に対応しています」(中森)

この密なコミュニケーションには、技術的な支援以上の意味があります。

「やはり、品質に対する意識や徹底力は、海外のメンバーと日本に温度差はあるようです。現地チームが“システムが直ったからクローズして良いだろう”と考えても、私たちは“いや、真の原因が特定できるまで終わらせない”と食い下がります。日立ヴァンタラとして、日本で長年培ってきた品質への姿勢を、日々のやり取りを通じて共有し、グローバル全体での品質レベルをさらに高めていきたいと考えています。」(中森)

データインフラの未来を支える、 持続的な品質イノベーション

「品質保証部門」と聞くと、出来上がった製品を検査し、決められた基準に沿ってチェックリストを埋め、時には開発部門に「ダメ出し」をするだけの保守的な部署を想像するかもしれない。しかし、日立ヴァンタラで働く担当者たちの姿は、それとは全く異なります。

品質保証本部 開発品質保証部部长 森永 広介は、「日立ヴァンタラの品質保証部門は、製品品質を高めるために、開発部門や他組織と組織を超えて協働します。単に完成品を評価するだけでなく、課題を共有し、より良い設計や実装に向けて議論を重ね、伴走しながら最高の製品を作り上げるパートナーなのです」と話します。

そのスタンスは、社内にとどまらず、社外のバリューチェーン全体をも巻き込みます。梅澤は、次のように話しています。

お客さまの声

“ 日立ヴァンタラ社の幅広い製品ラインナップ、卓越した経験、そして業界をリードする基準に感銘を受けました。同社の製品とサービスは、私たちにとって品質の保証でした。

China Southern Fund ”

出典：hitachivantara.com/en-us/company/customer-stories/china-southern-fund-management-case-study

「私たちにとって、部品はただ買うだけのものではありません。その部品がどのような工場で、どう作られているかまで深く把握し、サプライヤー様とも一緒に良いものを作っていく。万が一品質に問題が生じれば、設計から製造、調達まで、すべての工程・現場にすぐ駆けつけます。現場・現物にこだわり抜くこと。それが品質を担保する一番の近道だからです」

出荷された製品は、お客さまの現場で稼働します。品質保証本部 本部長 中森 学は、「製品は出荷したら終わりではありません。そこからお客さまのビジネスの稼働を守り抜くことが我々の使命です。品質へのこだわりは日立のDNAそのもの。決められたルールを守るだけでなく、より良くするために自らプロアクティブにアクションを起こす。そして、自分たちの手から出たものには最後まで責任を持ち、万が一の際でも逃げることなく、お客さまの現場で事態が完全にクローズするまで見届けます」と話します。

妥協なき設計、過酷なテスト、現場への介入、そして根本原因まで向き合うサポート。これらすべての品質活動を統括する最高品質責任者 (CQO) 岡木 拓也は、品質保証部門の使命について、以下のように話しています。

「品質への妥協を決して許さないアンカー＝錨になること。それが私たちの役割です。製品出荷において、最後の判断を下すのは品質保証部門です。ダメなものはダメだ、と毅然として立っているからこそ、設計部門や製造部門も厳しい意見を真摯に受け止め、会社全体として品質にこだわり続けることができます。日立ヴァンタラの品質は、私たち品質保証部門が守り抜く。その重い責任と誇りを胸に、日々の業務に取り組んでいます」

現代社会において、データは企業の命綱であり、社会を動かす血脈でもあります。AIの活用が急速に進み、ITインフラの重要性が下がらないほど増しているいま、システムが停止すれば、その影響は計り知れません。日立ヴァンタラのストレージシステムが世界中で「Unbreakable = 壊れない」と称賛される理由は、高度な技術力や堅牢なアーキテクチャーの根底に、品質保証部門の担当者1人ひとりの「確実にデータを守り、お客さまのビジネスを止めない」という熱い信念にあるのかもしれない。社会から信頼され続ける存在として、日立ヴァンタラはこれからも、終わりなき品質革新に挑み、世界中の社会システムを力強く支えていきます。



日立ヴァンタラ株式会社

お問い合わせはこちら

<https://www.hitachivantara.com/ja-jp/home>